日本におけるスポーツマンシップの研究～スポーツ教育を中心に～

A Study of the sportsmanship in Japan: Focusing on sports-education

1K04B020-1

伊藤 圭佑

指導教員

主査 志々田文明先生

副査 杉山千鶴先生

1. はじめに

長年私がサッカーを行ってきた過程においておよそスポーツのポジティブなイメージと乖離した現場に何度も遭遇してきたことから、私は「スポーツが社会性を育む」ということに疑問を持った。そんな中で知ったのが広瀬一郎の「日本人はスポーツマンシップを理解していない」という考察であり、ここに私の疑問を解決する糸口があると考えた。そこでこれを基にして「なぜ日本ではスポーツマンシップは理解されていないのか」それならば「スポーツマンシップ教育がなされることの有用性は何か」という課題を見出した。この課題を研究することが本論の目的である。

2. 日本におけるスポーツマンシップの欠如

まず、なぜ日本ではスポーツマンシップが理解されていないのかの考察を行ったのが第I章である。そこでスポーツマンシップの歴史を振り返ると英国ではパブリック・スクールにおいてスポーツを通じて社会性を教育することを目的にしていたことがスポーツマンシップの始まりだったようである。つまり、スポーツマンシップとはスポーツを通じて養われる社会性なのである。

しかし、日本ではスポーツは近代的な軍隊を早急に作るために「体が強く、規律をよく守る」兵隊を育てるという目的のために体育として受容された。その結果、相手(チーム)を思いやるフェアプレーや、「友人を大事にする思いやり」などのいわゆるスポーツマンシップが欠如してしまったのだ。

そして、それによる現代体育(スポーツ)が抱える問題について考察したのが第II章である。そこでは、近代体育は実力主義をよとする近代感情を形成する役割を担っているが、そこではスポーツマンシップが欠如してしまっているために勝利至上主義を助長してしまっているという問題が明らかになった。よって欠如しているスポーツマンシップは教育されるべきものであることを導いた。

3. スポーツマンシップ教育の有用性

広瀬一郎は「スポーツマンシップを考える」の中でスポーツマンシップはスポーツにおいて「ルール、相手、審判を尊重すること」であると教育されるべきだと述べている。より簡単に言えばスポーツマンシップとは「尊重する」ということなのである。そして、この概念は藤原正彦が「国家の品格」で述べている論理に頼り切った近代の限界を解決するための「情緒力」にあたるものであり、スポーツマンシップ教育は近代の行き詰まりを解決することができると考えられるのである。

また、「これまで体育教育が制度として十分機能してきたこと」と「日本人のスポーツ価値意識が精神性にあること」という2点から先述したような内容だけではなく効率性の面でも有用であるということが言えるのである。

結論

スポーツマンシップとは、スポーツを通じて身につけることができる社会を円滑に動かしていく力、つまり自分を取り巻く様々なものを「尊重する」ということに他ならない。しかし、日本ではスポーツが体育として導入されたことからこの

徳目は受容されなかった。その結果、日本の体育教育では勝利至上主義が蔓延し、本来スポーツによって養われるはずの社会性が教育されないばかりではなく、いじめの温床にまでなってしまう。

このような現状に対し、スポーツによって「ルール、相手、審判を尊重する」ということを指導する、すなわち日本におけるスポーツマンシップの教育は実社会においても社会性を教育することができるのである。また、これまでの体育教育の機能、日本人のスポーツ価値意識から効率面で考えてもスポーツマンシップ教育は社会性の育成に有効であると考えられる。

よって今後日本におけるスポーツマンシップ教育については見直される必要があるのではないかと考えられる。